MHWと異世界の海賊

バルバルサン

ＭＨＷ×ＯＮＥＰＩＥＣＥ

亜空間爆弾の影響で、ＭＨＷの世界に、麦わらの一味がやってきた!?

とりあえず、戻る方法を見付けるまで、アステラで過ごすことになった麦わらの一味

彼らが、異世界の新大陸にどんな影響を与えるのだろうか……？

注意：

麦わらの一味はこんな弱くない！

モンスターはもっと強い！

といった強さ議論は感想が世紀末状態になる可能性があるのでご遠慮ください。

皆様の、暇つぶしになったらこれ幸いです。

目次

とある日のアステラ。あるいは嵐の前触れ　1
とある日の麦わらの一味。あるいは、嵐の前触れ　5

とある日のアステラ。あるいは嵐の前触れ

新大陸にある、新大陸古龍調査団の拠点、アステラ。
そこは、船の廃材を中心とした資材で作られた、新大陸における古龍などのモンスターを調査する拠点である。
その一角、無数の本が積みあがった生態研究所と呼ばれる場所において、そこの所長を任されている男性が本を読んでいた。
それだけなら特筆すべき光景ではない。彼は、暇さえあれば本を常に読んでいるのだから。
だが、読んでいる本がいつもとは少し違った。
いつもは、モンスターの生態に関する調査書を呼んでいるのだが、今日読んでいるのは、古文書のような本であった。
そこに近づいてきたのは、若い大剣使いであり、総司令の孫である調査班リーダーである。
「所長、何読んでるんです？」

「……ん。古代の昔話の本や」
「へぇ、珍しいですね、所長がモンスターの本以外を読んでるなんて」
「この本はな、はるかな昔。それこそ、古代竜人すら生まれるより前に起こったとされる大戦の話や」
「……なんだか、すごいスケールの話ですね」
「そうやろ。少し、話してやろうか」
「ええ、ちょうど訓練も終わって休憩中なんで、暇だったんですよ」
「……ん。遥かな昔々……」
はるかな昔々。この世が形成されて間もない頃の話。
この世界の創造主は、フィギアに命を与えることで命を増やしていったという。
その世界は非常にいびつであったが、彼らは彼らなりのルールの元、生きていた。
だが、その世界をさらに歪めることになることが起こる。
亜空と呼ばれる場所から、禁忌の名を持つ魔神が現れたのだ。
奴はこの世界の創造主を操り、二人の大魔王を使って邪魔になるであろう戦士たちをフィギアに戻していった。

その魔神と戦士たちの戦い、亜空戦争は戦士たちの勝利で幕を閉じた。
だが、その戦争で使用された爆弾、亜空爆弾によってこの世界は非常に世界の壁と呼ぶべきものが薄くなっている。
後の世に生きる者よ。もしかしたら、君たちの世に、異世界からの来訪者があるかもしれない。
その世界の住人にとって、恐らくこの世は異質だろうが、この世界に生きる者にとっても、その者たちは異質だろう。
この世界に迷い込んだその者達、異界人をこの世界か元の世界に返す方法を記す。
その方法は、亜空操作装置。それを起動する事。
亜空操作装置を起動するには強力なエネルギー源が必要だ。
例えば、強力な竜の生命の塊、竜玉など。
そして装置は……
「……と。解読できたのはここまでや。これ以降は破損が酷くて読めん」
「……なんというか、俺には想像もできないような話でしたね」
「やろ。わしもこの古文書に書いてあることすべてがほんまやとは思わん。だが……」

そして、所長はふと笑い……

「なにか、太古のロマンがあると思わんか？創作だったらだったで、古代人の小説かもしれんしな……ホンマやったら、もしかしたら、わしらも異世界の存在に会えるかもしれん」

「……ですね」

そして、調査班リーダーは鍛錬に戻り、所長は古文書を横に置き、調査報告書を読み始めた……

だが、物語は彼らの知らない場所で進む。

亜空軍が使用した亜空間爆弾によって薄まった世界の壁。

その影響が、様々な世界に出始めていた。

この話を調査班リーダーが聞いた数か月後、第五期調査団の船団が新大陸へと近づいているころ……

亜空を通じ、とある世界から、一隻の海賊船がやってきた……

とある日の麦わらの一味。あるいは、嵐の前触れ

グランドライン。海賊王ゴール・D・ロジャーが放った一言により、大海賊時代となったこの世界。

その遥かな海上を走る一隻の海賊船、サウザントサニー号。その上では、今日も今日とで麦わらの一味がにぎやかに過ごしていた。

彼らはつい先日、魔の海域において、王下七武海ゲッコー・モリア一味を打倒したばかりで、海の底にあるという魚人島を目指していた。

「んー、今日もいい天気ね。魔の海域はじめじめしてたけど、今は夏の気候ね」

「ふふ、そうね」

そう言いながら太陽の光を一身に浴びるのは、オレンジ色の健康的な女性、ナミと黒髪の艶めかしい女性、ロビンで。

その後ろでは、精神年齢が少年のまま固定されているかのような男性陣が釣りをしている。

長い鼻が特徴的なウソップ。人間トナカイのチョッパー。そして我らが船長、麦

わらのルフィ。
「釣れねーな、魚」
「そーだな。昨日までは入れ食いだったのに、何かあったのか？」
「さぁな。でも、グランドラインなら、魚がいない海域ってのもあるんじゃねぇか？」
そうウソップがぼやきつつ、釣竿を垂らしていると、一匹の魚がかかったようだ。
強く。すさまじく強く竿が引かれる。
「おおおおおおおお!?」
「お、ウソップ。かかったのか？」
「ああ。こりゃ大物だぞ……ルフィ、チョッパー、手伝ってくれ！」
そう言えば、ウソップとルフィ、そしてチョッパー三人が力を合わし、釣竿を上げれば……
ザ……ッバァン
「お」
「お？」

「おおおおおおおお！でっけぇ！」
釣りあがったのは、巨大な、見たことのない魚だった。
口には恐ろしく鋭い牙が並び、ひれと言うよりは翼のような胸びれ。そして……足。
ルフィは目を輝かし、ウソップとチョッパーは目を丸くしている。
「な、何じゃこの魚」
「見たことねぇ……図鑑にも乗って無かったぞ」
「すっげぇ！なんか、立ち上がりそうだ」
「はは、ルフィ、魚が立ち上がり何て……」
ビチビチチチ……
むくり。
ギロリ。
「た……」
「立ったぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
ギエエエエエエエエエエエ！

その、巨大魚の鳴き声に、船のチェックをしていたサイボーグ、フランキー。下ごしらえをしていたサンジ、BGMを鳴らしていたブルックが集まってくる。

なお、剣士ゾロは寝ている。とある理由から大ダメージを折っている彼は、深い眠りで体を休めていた。

「何だぁ？」

「ヨホホ！すさまじく大きな魚が……」

「立ってる!?」

そして、太陽の日を浴びていた女性陣もやってきて……

「なに？この魚……海王類？」

「いえ、海王類は蛙型以外は立たないわ」

そう言いながら集まってきた人間どもに対し、魚？の挨拶は……

口からの、水流だった。

「うおおおおおお！」

「船が切れた！」

「こいつ……！」

真っ先に動いたのは、ルフィとサンジだった。
表情を引き締め、魚？にかかっていく。
「ゴムゴムのぉ……バズーカ！」
「コリエシュート！」
巨大な魚？の首を狙い、サンジの蹴りが。顔面を狙い、ルフィの掌底が向かう。
ドゴォン！
そう、大きな音と共に魚？は大きく後退した。
魚？にとっては、まさか素手の人間如きにダメージを負わされたのが信じられないのか、魚？なりの驚愕の表情を浮かべる
だが、驚愕していたのは魚？だけではない。
「ぐ、硬ぇ……！」
「おいおい、後退しただけかよ……！」
自分達は手加減などしていなかった。なのに、後退しかさせられなかったことに、二人は驚いていた。
そして、再び魚？が水流を出そうとすれば……

「や、やらせるか！火の鳥星！」
「ウエポンズレフト！」
火の鳥のような炎と、砲弾が魚？の顔面にぶつかり、大爆発が起こる。
「よっしゃぁ！魚の丸焼きいっちょ上がり……」
「いや、どうやらまだ……！」
そう、まだ致命傷ほどのダメージは通っていないようで、怒り狂った魚？は、腹ばいで体当たりを行ってきた。
だが、魚？は気が付かなかった。頭上に浮かぶ、黒雲を。
「サンダーボルトテンポ！」
ドォン！と雷が魚？に落ちる。そして、痺れて動けなくなった魚？に対し……
「ランブル！ロゼオミチェーリ！」
「鼻唄三丁…矢筈切り」
「アルメ・ド・レール……ゴムシュートぉ！」
たたみかけるように、４人の技が魚？の胴体に襲い掛かり、大きく吹き飛ばした。

船の端にぶつかり、大きな煙が上がる。
「こ、こんだけやれば、流石に……え？」
だが、まだまだ息絶えてはいないようで、よろ、よろ、よろと立ち上がる。
大きなダメージはおっているようだが、あれだけの攻撃を受け、生きていることに、ナミやウソップなどは驚愕に目を見開く。
「うそでしょ！」
「何だこの魚ぁ！」
これで中途半端な攻撃ではらちが明かないと思ったのか、サンジは高速で回転し、ルフィは足をポンプのように動かす。
そして……
「ギアセカンド……！ゴムゴムの、ジェットマグナム！」
「ディアブルジャンプ！」
二人の、高威力の技が、逃げようとしていた魚？を襲う。
そして、二人の攻撃で浮かび上がった魚？は……サウザンドサニー号に叩きつけられ、今度こそ息絶えた……

「はぁ……はぁ……」

「何だったんだ？この魚……」

気の弱いチームは恐る恐る魚？に近づき、ルフィは今夜は宴だななんて能天気なことを言っている。

そんな時だった。前触れの無い海震が、船を襲う。

「な、何だってんだ今度は！」

「地震？いえ、海震!?」

そう麦わらの一味が慌てていれば、目の前の、何もない空間に、不気味な黒い球体が現れる。

「なんだ？ありゃ……」

「穏やかじゃねぇな。いくらグランドラインって言ったって、常識はずれ過ぎるだろう」

「ヨホホ……ワタクシ、鳥肌が立ってきました。ま、肌なんて無いんですけど！」

そして、ナミは気がついた。球体が、どんどん大きくなっていくことに。

「不味い！あの玉、大きくなってる……！」

「ぜ、全速で後退！」
ウソップが慌てそう叫ぶが、玉の巨大化は加速度的に増し……
すさまじく恐ろしい吸引力を持って、船を飲みこんだ！
そして、グランドラインから、麦わらの一味は消滅した……

さぁ……さぁ……
さぁ……さぁ……
雨粒が、気絶していた麦わらの一味を目覚めさせる。
最初に目を覚ましたのは、ナミだった。
「う、うぅ……ここは……？」
ぼぉっとした頭で、周囲を確認する。周囲には、気絶したロビンに、ウソップやチョッパー。サンジ、ブルックにフランキー。そして気絶と言うより、ぐっすりと眠るゾロとルフィ。
そして、なにか、変な感じを肌で感じる。

それは、航海士として卓越した感覚を持っている彼女だからこそ気が付けた。気候の変化。

「……？え、まって……」

先ほどまでの気候、肌で感じていた空気と、まるで違う「空気」

そして、腕についたログポースを見れば……

「ログポースが……ぐるぐる回転してる……」

まるで、グランドライン内でのコンパスのように、ログポースが回転している。

それに驚愕しつつ、普通のコンパスのある、自室へと向かえば…

コンパスは正常に動いている。もしや、さっきの玉で、他のグランドライン以外の海域に飛ばされた？

そう考えていると、どうやらロビンや他の馬鹿たちも目を覚ましたようで……

「う、うう……」

「何だったんだ、一体……おい、起きろルフィ！ゾロ！」

そう言って、二人を蹴り飛ばしつつ、サンジがナミを見付ける。

「ナミすぁん！無事でしたか！」

「……ええ、みんな、聞いて。もしかしたら、ここは……」
そして、起きた皆にナミは現状を伝える。
「……なるほど、ここは、もしかしたらサウス、ウエスト、ノース、イーストのどこかの海域かもしれないのか」
「……」
「どうしたの？何か、納得して無い表情だけど」
「ええ、何か、空気が。根本的に違う気が……」
そう、不安そうな表情のナミ。すると、メインマストの上にのぼったルフィが、大声をかける。
「船だぁ！」
「船？」
そして、皆が大雨の向こうを見ようと目を凝らせば……
そこには、船団を組んだ大型の船が航海をしていて……
これが、ファーストコンタクト。
異世界からの来訪船第一号と……

アステラに向かう、第五期団の乗った船団……
彼らの出会いが何を意味するのか。それは、誰にも分らない……

MHWと異世界の海賊

著者　バルバルサン

発行日　2020年3月4日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/176946/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。